立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　コミュニティ福祉学　研究科　コミュニティ福祉学　専攻		
研究代表者（2016年3月現在のものを記入）	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・後期課程４年	星野　友里　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	コミュニティ福祉学研究科・教授	森本　佳樹　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	住人側から見た、高齢者のグループリビングの現状と課題		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・後期課程４年	星野　友里	
研究期間	２０１５　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）153,275円／（採択金額）200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

グループリビングは制度に寄らない住まい方で、1970年代から自然発生的に行われてきた。しかし、NPO法人や社会福祉法人等の第三者がそれを事業化すると、入居者が集められなかったり、「グループリビング」にならなかったり、当初想定していた通りに運営できないケースがしばしば見受けられる。

そうした事態に対し、筆者は、グループリビングの実践においては、空間構成や運営方式といった外面的条件の整備に加えて、そこで生活している人の方に目を向ける必要があると考えた。本研究は、グループリビングの住人を対象にインタビュー調査を行い、グループリビングの現状と課題を住人の視点から改めて整理したものである。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　グループリビング　〕〔　高齢者住宅　〕〔　高齢期の住まい・住まい方　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究の位置づけ：

本研究の最大の独創性は調査対象にグループリビングの住人を含めたことにある。

筆者は、「グループリビングについて論じるならば、運営者だけではなく住人の意見も聞く必要がある」という問題意識の元で研究を進めてきた。具体的には、2012～2014 年度には日本各地の*グループリビング運営者らを対象としたインタビュー調査*、2014 年度には*住人を対象としたアンケート調査*を実施した。そして本年度は、*住人から直接話を聞き（＝住人を対象としたインタビュー調査・本研究）*、より具体的な論考のできる段階に達した。

グループリビングの本質、言い換えれば「グループリビングらしさ」というものは、外から見ているだけでは分からない。したがって、本研究は筆者がこれまで行ってきた一連の研究の中で、最も重要な位置を占めるものだと断言できよう。

本研究は、以下の調査を主軸としたものである。

名称： グループリビング住人の生活意識に関するインタビュー調査

研究目的：

本研究は、住人側から見た高齢者のグループリビングの現状と課題について整理することを主たる目的とする。

これまでに筆者が高齢者生き活きグループリビング（以下、JKA 補助グループリビング）を対象に行ってきた調査研究によると、“住人側の考えるグループリビング”と“グループリビング運営者側の考えるグループリビング”のあいだに多少の認識の不一致が見られる。そこで、本研究では、住人を対象にしたインタビュー調査（本調査）を通して、前者をより掘り下げていく。

調査対象：

JKA 補助グループリビング 5 ヶ所で生活する 10 名を対象。彼らは、筆者が前年度に実施した「グループリビング住人の生活意識に関するアンケート調査」（以下、アンケート調査）の回答者である。本調査では、アンケート調査の調査票の末尾において、追加の聞き取りの了承が得られた全員を対象者として選出し、調査案内を送付後、はがきで再度意思の確認を行った。

なお、上記のうち 1 名は書面での回答となった。

調査期間：
2015 年 6～7 月

データ収集法：
半構造化面接によるインタビュー

質問項目：

①グループリビング入居の経緯、②グループリビングの良いところ・良くないところ、③「グループリビングらしさ」を感じる点、④本格的に介護が必要になったときの意向、以上 4 項目

分析方法：

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践』を参考にコード・マトリックスを描き、概念モデルの構築を試みた。

倫理的配慮

本研究は、コミュニティ福祉学部・研究科倫理指針に基づき実施する。

関係者および関係各所の名称は全て匿名化し、個人が特定されないように留意する。また、本調査で得られた結果については、研究目的以外では一切使用しない。

結果： 本調査では、以下の 4 カテゴリーが生成された

≪カテゴリー1≫ グループリビング入居のいきさつ

＜サブカテゴリー＞ (1)「自宅」の生活が続けられる ― ①食事が提供される ②立地条件が良い
(2)「高齢者施設」を探していた ― ①居室面積が広い ②娘の家が近い
(3) 知人の紹介・存在 ― ①知人の紹介・存在 (4) 家族に配慮 ― ①家族に配慮

≪カテゴリー2≫ 好きに出歩き、自分の生活を維持・継続している

＜サブカテゴリー＞ (1) グループリビングの他の住人との関係は「近所」づき合いの一環
― ①お互いの部屋の行き来あり ②横のつながりができる ③気をつかう
(2) 要介護時は転居も視野に入れている ― ①要介護時は転居も視野に入れている
(3) グループリビングの外に活動の場を持っている ― ①グループリビングの外に活動の場を持っている
(4) 生活改善・向上に意欲 ― ①ミーティングを定期的に行う ②住人同士で助け合う
③自主的に集まりを企画する ④スタッフに要望を伝える ⑤「対等な関係」の壁

≪カテゴリー3≫ 生活の変化に適応できず、状態が停滞・悪化している

＜サブカテゴリー＞ (1) とじこもり傾向 ― ①人の部屋に入らない・入れない ②外には出ない・出られない
(2) 心身の不調 ― ①孤独感がある ②することがない ③体力が低下した
(3) 付き合う人の数が減少 ― ①住人の数が少ない ②他の住人と打ち解けられない ③大小のイベントに人が集まらない

≪カテゴリー4≫ グループリビングが地域に根付かない

＜サブカテゴリー＞ (1) グループリビング単位での地域交流に関心が低い
― ①今の自分には必要性を感じない ②周囲の賛同が得られない (2) 負担感 ― ①余力がない

研究成果の概要　つづき

考察：　調査の結果、以下の現状と課題が見出された

1.　グループリビング入居のいきさつ

調査対象者は皆「グループリビング」で生活しているが、事前にそれを理解し、入居を決めた人は一人もいなかった。本調査の結果、グループリビングの住人は立地条件等を考慮し「『自宅』の生活が続けられる」と見定めて選んだ人（以下、Aタイプ）と、「高齢者施設を探していた」ところ、居室面積が広いことや娘の家が近いことを理由にグループリビングへ住み替えてきた人（以下、Bタイプ）の2タイプがいることが分かった。

グループリビングと食事の提供は必ずしもセットではないが、大部分のグループリビングではそれが住人の共同行為として取り入れられている。「自立」の状態にあるとしても、体力の低下や配偶者の死亡などで食事作りを負担だと感じるAタイプの人にとっては、この点が魅力的に感じられる。具体的には、調理の手間が省け、なおかつ、その分の労力を他に充てることができる。

一方、Bタイプには、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）も転居先の候補にあり、実際に見て回っていた人たちが当てはまる。JKA補助グループリビングは財団法人JKAからの多額の補助を受けて建てられたもので、25㎡という居室の広さの割に月額費用が低く設定されている。そのため、民間の運営・経営する有料老人ホームやサ高住よりも安価で広く、設備の整った部屋に住むことができる。また、娘の家に近く、日常的な支援や緊急対応が期待できることも、彼らがグループリビングを選んだ理由の一つである。

なお、「知人の紹介・存在」や「家族に配慮」（同居・別居を問わず）といった要素は、両タイプでも共通して見られた。

2.　＜Aタイプ＞ 好きに出歩き、自分の生活を維持・継続している

まず、「自宅」のつもりでグループリビングを選んだAタイプの人たちは、自分で料理をしなくなったこと以外は、以前とそう変わらない生活を送っている。グループリビングにおいては、日中どのように過ごすかは個人の「自由」であり、運営法人は基本的に関知しない。そのため、土地勘があって身体の自由も利くこの人たちは、グループリビングの外へ出て、自分の趣味・趣向に合った活動をし、グループリビングの他の住人とも「近所」づき合いをしている。ミーティングや住人同士の助け合いも、彼らには自分たちの生活をより良くしていくうえで有効な手立てとして受け入れられており、要介護の状態にない人が多いこともあって、「お世話になっている」と遠慮することなく、グループリビングのスタッフに要望を出したり、自主的に集まりを企画したりしている。ただし、彼らが先頭に立ち、運営者ではなく住人主導で何かをしようとすると、住人同士が「対等な関係」にあることが壁となり、住人の内部から反発されることがある。

3.　＜Bタイプ＞ 生活の変化に適応できず、状態が停滞・悪化している

対して、ひとり暮らしの不安あるいは限界を既に実感しており、それを無くすためにグループリビングへやって来たBタイプの人たちは「とじこもり傾向」にある。この人たちは、グループリビングの中（他の住人）と外（地域）との接点を持っていない。健康不安や「呼び寄せ」による不慣れが外出を思いとどまらせ、場合によっては、住人の意に反したグループリビングの「規定」あるいは「規則」が住人同士の私的な交流を制限している。なかでも、娘との近距離別居をめぐっては、日用品の買い出し等の手厚い支援を娘から受けやすい反面、住人がグループリビングの外へ出て、「地域住民」の一人となるきっかけを失わせている。彼らは「老人ホーム」に近い感覚でグループリビングに来ており、現在も「グループリビング」に関しては施設名称と理解している様子だった。そのため、グループリビング本来の「周りの住人と助け合いながら、あるいは、折り合いをつけながら生活していく」という意識が希薄である。その結果、一部の例外を除いては、日中はすることがなく、世間話をする「近所」の人もおらず、心身の不調を訴えている。

4.　地域交流への関心の低さ

JKA補助グループリビングは「自宅」の延長線上にあり、地域に対して開かれたものだとされている。ところが実際は、地域交流の場が常設されているグループリビングは稀で、「呼び寄せ」の人たちには前提となる「住み慣れた地域」が存在していない。

よって、新しく何かをする気力や体力がない人は、グループリビングの中だけで生活が完結しがちである。他方、自由に出歩ける人たちには自分の世界があり、何かしら催されたとしても、自分の好みに合わない活動をグループリビングで改まってする意味を見出せない。グループリビングにおける地域交流の在り方に関しては、その対象・内容ともに早急な見直しが必要である。

全体のまとめ：　高齢者が集まって生活しているだけならば、サ高住や特別養護老人ホーム等と大差なく、これらとグループリビングの境目は住人同士に相互扶助の理念が浸透しているか否かにある。すなわち、グループリビングとは理念先行型の住まい方で、住人の理解があって初めて成り立つものである。

グループリビングという住まい方の認知度の低さを考えると、それを入居前に十分理解した人だけを受け入れることは現実的には厳しいだろう。しかし、入居後、数年経っても「グループリビング」が分からないままの人がいるという現状は、運営法人の説明が不足していると考える。仮に、グループリビングのことを理解できる住人が現れたとしても、他の住人が分からないとグループリビング全体は機能しない。グループリビングの入居対象は「自立」から要介護までと幅広く、皆の意に沿うような形を維持していくためには多くの配慮を要し、多少は運営法人の後方支援がいる。ところが、JKA補助グループリビングの運営法人は介護保険事業を並行して行っている所がほとんどで、グループリビングに力は入れられていない。

本調査において、体力が低下してくると地域交流が億劫になるという住人の声があったが、地域交流とは必ずしもイベントの開催を意味しない。そうした大掛かりなものは見栄えは良いが、単発で終わりがちで、住人が得られるものが少ないだろう。体調の面で外出がままならず、自由時間を持て余している住人のことを考えると、もっと規模の小さい、日常的な交流を促すような趣味サークルの方がグループリビングには適しており、住人の状態が停滞・悪化している現状に対して有効だと考える。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

④　学会発表（予定）
第 64 回（2016 年度）日本社会福祉学会　秋季大会
期日　2016 年 9 月 10 日（土）～11 日（日）
会場　佛教大学　紫野キャンパス

以上